アメリカへ
――ユダヤ移民――

01C046　宮澤美枝

はじめに

私がユダヤ人を初めて意識したのは、小学生の時に読んだ「アンネの日記」と、アウシュビッツに入れられた少年が書いた蝶の詩である。杉原千畝の生涯をテレビで見た時もそうであったといえる。

しかし、ユダヤ人を認識したのは、舞台と映画で見た「屋根の上のバイオリン弾き」によってである。この映画は、名曲がたくさん入っているし、しっかり作られていて、私の好きな映画の1つである。

牛乳屋のテヴィエは、重い荷車をひいていても、どんな時でも天に向かって神と話している。そして、常に「しきたり、しきたりなしでは、わしらの生活は不安定。屋根の上のバイオリン弾きと同じ」とばかりに、ユダヤ教の教えを厳しく守って生活を営む。

どうして、神が唯一であり、しきたりを重んじなければならないのか、私には理解できなかった。それでも、しきたりは娘たちによって次々と破られ、テヴィエはかんかんにおこりながらも、結局は娘の幸福のために許していく。ただ、キリスト教徒の若者と結婚する3番目の娘だけは許さない。そして穏やかに暮らしていたアナテフカを追われて,新たな土地へ向けて移動していく。

ユダヤ教とは何か。なぜ、それほどに強く信じられるのか。なぜ、ユダヤ人であるだけで迫害され、住む地を追われるのか。

のほほんと生きてきた戦後生まれの宗教を持たない私には、理解できないことばかりの映画でもあったが、今回、アメリカ研究Aの授業でアメリカの少数民族について学ぶ中、なぜユダヤ人が祖国をもっていなかったのか、なぜ迫害され続けるのか、私はこの2つのことを知りたいと思うようになった。

本レポートでは

1．ユダヤ人の歴史
2．アメリカへ移民した理由
3．ホロコースト
4．ユダヤ人への差別

について調べながら2つの答えを探していきたいと思う。

1．ユダヤ人の歴史

約4千年前、イスラエルの民の祖であるアブラハムが、エホバという神の啓示を受ける。神の戒律を守るなら、アブラハムの子孫を「選民」とする契約をする。戒律とは、全ての男の子は生まれて8日目、改宗したものは必ず割礼をすれば、カナン（イスラエル）の地を約束するというものである。

アブラハムは、ひたすら唯一全能の神を信じ、神の啓示の通り、カナンの地をめざして放浪の旅に出る。幾多の困難にもめげず、アブラハムは神との契約を守り、神をあがめて放浪の末、カナンの地を手に入れる。

ユダヤ人に祖国とまではいかないが、ユダヤ人の住む地はあったのだ。しかし、カナンは日本の四国ぐらいの面積で、岩砂漠の所である。飢饉によってカナンの地を離れなければならなくなったり、異教徒によって放浪と奴隷と殺戮を余儀なくされるが、苦難の末、またカナンの地に戻る。

紀元前6世紀にバビロニア人によって、エルサレムを追われてからはちりぢりになってしまう。1948年、パレスチナの土地が分割され、ユダヤ国家「イスラエル」が建国されるまでの約3千年間、自らの国家を持つことなく、異質な文化の中で「ユダヤ人」として生きのびてきた。

ユダヤ教の教えを説く「トーラ」とユダヤ教徒としての生活を示す「タルムード」を支えに、迫害されつづけながらも、同化してしまうことなく、異質でありつづけたユダヤ人。 これは何を意味するのだろう。「異なる者」であり続けたために反感を買い、迫害され続けてきたユダヤ教徒。神に選ばれた「選民」の誇りと共に、ユダヤ人は神の啓示に従って旅に出た末に「カナン」の地を手に入れたのだから、神に約束されたその地に再び「ユダヤ国家」を建国するという切実な思いがあったことは想像に難くない。祖国を追われて3千年の間、持ちこたえるほどの信仰の強さにただ敬服する。

2．アメリカへ移住した理由

1990年代における全世界のユダヤ人は約1,500万人、そのうちアメリカのユダヤ人が約590万人で、イスラエルのユダヤ人が約585万人。ということは、ユダヤ人口の約半分はアメリカに住み、約半分はイスラエルに住んでいることになる。

アメリカに住むユダヤ人は、移民してきた国によって、スウェーデン系、ドイツ系、ロシア系、ポーランド系…と分かれ、「ユダヤ人」としては、人口統計に表れない不思議な人種である。

ユダヤ人が多く住んでいる地域は東海岸が中心で、その人口構成はニューヨーク州に165万人、ニュー・ジャージー州に44万人、ペンシルバニア州に33万人、カリフォルニア州に92万人などとなっている。

1654年9月にポルトガル人によって追われ、ブラジルからニュー・アムステルダム（現ニューヨーク）に逃げてきた23人が、ユダヤ人の移民の始まりと言われている。

ここでは、1820年頃から始まる移民から記す。

（1）1820年～1880年

ヨーロッパに吹き荒れた反ユダヤ主義を逃れて、アメリカへ渡ってきた。中央ヨーロッパの政治混乱や社会不安をユダヤ人に向けたのだ。それまで、アメリカのユダヤ人口は1万人だったが、25万人に増えた。特に多かったのは、ドイツ系で15万人を占めた。

しかし、19世紀のアメリカは開拓が進んでいく時で、多くの農民、労働者、商人を必要としていたので、ドイツ系ユダヤ人は、アメリカ社会の中へ溶け込み同化していった。1890年代には、実業家、商店主、医師、弁護士…と彼らは成功していく。

アメリカに同化していったドイツ系ユダヤ人の多くは、ユダヤ教の改革派となる。聖書は尊重するが、ユダヤ人の生き方を戒律でしばらない。無帽、ひげなし、英語を話し、女性のラビも認めた。

（2）1881年～1924年

東ヨーロッパやロシアからの迫害を逃れて、多くのユダヤ人がアメリカへ移住し、ユダヤ人口は450万人を超えた。そのうち、ロシアからの移民は200万人に及んだ。この背景としてはヨーロッパの産業革命が封建社会の崩壊をもたらし、社会構造を大きく変革させたことが考えられる。日常生活や伝統を乱された人々はその不満をゲットーに住むユダヤ人に向けた。

ゲットーとは、ヨーロッパの諸都市で、一般から隔離し設けたユダヤ人の居住地のことである。外部とは壁で仕切られ、内部では、シナゴーグ（ユダヤ教会）を中心に自治共同体生活が営まれていた。学校、墓地、裁判所もあった。ユダヤ人は、ゲットーのなかでしか生きられなかったのである。

ポグロムと呼ばれるユダヤ人の殺りくが相次いだ。ゲットー全体が殺りくの対象になった。土地も職業も取り上げられたユダヤ人は生活していくために、仕立て屋、葉巻作り、小商人としての技術を磨かざるを得なかったのである。

ロシアから追われてきたユダヤ人は、貧しくて教養がない上に、ゲットーの中でユダヤ教の教えを忠実に守ってきた人々であったから、イディッシュ語を話す頑固なユダヤ教正統派の信者であった。帽子を被り、長い服を着て、ひげをのばし、ヘブライ語で祈り、戒律に基づいた食事をする。当然ドイツ系ユダヤ人との間に軋れきを生むが、ロシア系ユダヤ人もアメリカという異国でアイデンティティに苦しむことになる。しかし、彼らの中からも新しい環境に合わせた考え方をする者が生まれた。戒律は永遠であるが、今の世の中に合うように変更しても良いものがある、宗教儀式は行うがヘブライ語でなくとも良い、女性のラビもみとめる、しかしユダヤ教の教えはすたれさせてはならないというもので、この考えに基づき、ユダヤ神学校をニューヨークに設立した。

（3）1940年代

ナチスの全体主義から逃れてきたユダヤ人は、約30万人であった。有名な科学者、学者、作家なども多く、結果としてアメリカの文化度を高めることになった。その一例として物理学、科学、医学の分野のノーベル受賞者を比較してみるとよく分かる。

1910～39年　アメリカ14　ドイツ35

1943～55年　アメリカ29　ドイツ　5

その一方で、ナチスから逃れてきたユダヤ人は残酷すぎる体験を通して人間の尊厳を根底から剥ぎ取られてしまった。神を信じられなくなり、無神論者となった人も多い。

3．ホロコースト

1922年。ヒトラーはナチス（国家社会主義ドイツ労働者党）を強力に押し上げるとともに、徹底した民族主義を貫いた。彼は純粋なゲルマン民族の血筋を持つアーリア人の勝利か、アーリア人の絶滅ならびにユダヤ人の勝利か、というスローガンを掲げ、国民を扇動した。ヒトラーは、ゲルマン民族至上主義者で、東洋系のユダヤ人を劣等性民族と蔑み、絶滅を公言した。

1933年4月1日　ユダヤ人商店に対するボイコット例

1935年9月15日　ニュールンベルグ条例

- ユダヤ人に対する人種差別宣言（ユダヤ人は全ての法律上の権限を奪われた）

1938年11月9日　クリスタルナイト（水晶の夜）

- ユダヤ人に対する第3帝国の作戦開始

101の教会が放火によって破壊
76の教会が打ちこわされる
7,500の商店が破壊される
1942年1月20日　独ソ開戦
• ユダヤ人をシベリアに追放できなくなった。
ナチスはユダヤ人絶滅作戦を開始

ユダヤ人絶滅作戦とはイギリスを含む全ヨーロッパのユダヤ人約1100万人を強制労働で酷使した上に絶滅、老人、子供、病人、婦人はガス室で殺すという計画のもと、強制収容所を東ヨーロッパに1,000ヵ所、絶滅収容所を4ヵ所設立するというものであった。

実際ナチスによって犠牲になったユダヤ人は、500万～600万といわれる。2人に1人が殺されたことになる。言葉もない。本でたくさんの写真も見たが、裸にされ子供を抱いた女の人が行列をつくり、ガス室へ歩いていく姿がたまらない。せめて子供だけでも助けてと叫び続けた母親の叫び声が聞こえる。

ホロコーストから逃れてきたユダヤ人の心の傷を推し量ることなどできようか。

• うしなわれたものの大きさ
• 背負ったものの大きさ
• 魂が救われるかどうか
• 神がヒトラーを遣わせたなら、どうやって神を信じたらいいのか

ということを授業で学習したけれど、私はどの1つも想像さえできない。生き延びたユダヤ人のトラウマを我々は本当に理解できるのだろうか。

私は子供の時に受けたことが大きなトラウマになり、思春期の頃は「生きる」ことに目が向かなかった。いかに死のうか、死ねるのか。読む本は藤村操、奥浩平、原口統三、高野悦子など自殺した人の本ばかり買った。今でも本棚に並んでいる。当時は自暴自棄になり、人のことなどかまわなかった。

個人的な体験をレポートに書くことは適切でないかもしれないが、トラウマに苦しんだ私でさえ、ホロコーストを生き延びたユダヤ人の苦しみの深淵を覗くことすらできない。ユダヤ人であるだけで絶滅される運命はまさに想像を絶することであり、この歴史の事実をどう理解すればいいのだろうか。私にはその答えはまだない。

4．ユダヤ人への差別

「高利貸し、搾取者、裏切り者、けち、かぎ鼻、世界制覇のための陰謀に熱中している」ヨーロッパや北アメリカのキリスト教国で形成された反ユダヤ主義に基づく、ユダヤを悪く言うときの言葉である。

なぜユダヤ人は、それほどに悪く言われるのか。それは宗教と深い関係があると思う。

ユダヤ人が信じるユダヤ教は、旧約聖書だけが聖書であり、旧約聖書はイスラエル民族の建国史として読むことができる。そこには、ユダヤ人は神に選ばれ、カナンの地はユダヤ人が神によって約束された土地なのであると記されている。従ってユダヤ人は、アブラハムと神が契約したときの戒律を守り、モーゼの十戒を守り、信仰を厚くもっていれば、いずれ再びカナンの地へ戻れると思っている。

ところが、キリストが生まれ、そのキリストはユダヤ人の裏切りによって殺されるのだ。キ

リスト教が生まれ、それが世界に広まっていくと、ユダヤ教徒はキリスト教徒の「目の上のたんこぶ」になった。

ローマ帝国がキリスト教化してから、2度も大きな反乱を起こしたユダヤ人は、徹底的に打ちのめされた。「陰険な堕落した民族であり、神を否定しキリストを殺害したため、神に呪われている民族である。隷属的な身分につきおとされて、全世界に四散されたのは当然の報いである。」

更にキリスト教の聖書、新約聖書もユダヤ人を呪っている。ヨハネ伝には「なんじユダヤ人よ。なんじは悪魔の子である。なんじらは父の欲望を遂行させんとしている。その父は人殺しである。うそつきである…」とある。

これではユダヤ人が迫害されるのは当然である。キリスト教国で反ユダヤ感情がないところはないであろうと推測される。社会不満がうっ積すると必ずユダヤ人にむかうのもこのような背景と深く関わっている。

アメリカは移民の集まりであるが、真のキリスト教国であり、自由の国であるというアメリカニズムの強い国である。移民の集まりで、自由な夢を描ける国ではあるが、アングロ・サクソン系のプロテスタントがアメリカの担い手であるとされている。だから移民に寛容ではあるが、大量の移民が流入してくると強い排外主義をとる。アメリカは自由な国でありながら、排外主義も強いという大きな矛盾を持つ。

またアメリカは、ユダヤ移民に対して既成産業に就くことを許さなかったのである。仕方なくユダヤ移民はその頃ランクの低い、将来保証がなく、「主流」のアメリカ人が手を出さなかった、金貸し業、小さな小売店、既製服、映画、ラジオ、新聞産業に活路を開いていった。祖国を失い行き所のないユダヤ人は、アメリカに居つくために、劣悪な条件の中でひたすら働いたのである。

そして時代の流れが、ユダヤ人が就かざるを得なかった産業を花形にし、次々と大富豪を生み出した。そうなればなったで、ユダヤ人はアメリカを牛耳り、あらゆる富を握り、全ての金融筋を押えていると槍玉にあがり、差別される。やがて吹き荒れる反共、反ソ、反革のなか、特にユダヤ人の多い映画産業への赤狩りにつながっていくのは、痛ましい限りである。

3年ほど前のアカデミー賞授賞式の時、特別賞（だったと思う）に輝いたエリア・カザンがトロフィーを手にすると拍手とブーイングが同時に起こった。

今回の授業で「紳士協定」を初めて見たのだが、ユダヤ人差別の問題を捕らえて、社会に投げかけている良い映画だと私は思った。しかし、皮肉にもこの映画を監督したエリア・カザンは友人達の名前を反米活動委員会に告げ、その人達は共産主義者というレッテルを貼られ、映画界から追放された。その友人の中には当然ユダヤ人も含まれていた。50年が過ぎた今でも、ハリウッドを襲った赤狩り旋風は、決して忘れられてはいないのでる。私は授業の中で先生が言われた「そのことをエリア・カザンは一言も弁明していない」という言葉に深く興味を持った。

ハリウッドの映画が低迷したのは言うまでもない。私の中でのハリウッドの映画と言えば、ディズニーと娯楽とハッピーエンドとスケールの大きさでごまかした、中味のないものという定義がある。今はよい映画も多くなったので、映画館へ行くことが多くなった。

おわりに

ユダヤ人がアメリカで今の繁栄を築く大きな礎となったのは、いつの時代も迫害されつづけたゆえの民族の団結力であろう。

1843年にユダヤ人は、反ユダヤ主義に対抗する。ユダヤ連帯のための団体をつくっている。ドイツ系の名門、グッゲンハイム家などが資金を出して、職業学校、病院、老人ホームなどを作った。教育的、社会的レベルを上げることで、ユダヤ人に対する偏見をなくする努力をしたのだ。

また、東欧、ロシア系の中でも互助組織を持ち、互いに助け合った。そして貧しい中でも、自分たちのレベルを上げるために子供を大学へ上げ、法律、医学を学ばせた。今日、企業家、小売業、医者、弁護士、教師、公務員などが多く、非熟練労働者は全体の25％に過ぎないという。

このようにして、アメリカに根付いたはずのユダヤ人であるが、イスラエル国家建設のために、1930年代でも数百億ドルの資金を提供している。1948年にイスラエル国家が樹立されると、更に多額の資金が寄せられた。

ユダヤ人の血は、アブラハムと神が契約した4千年前から、少しも変わらずにエルサレムに戻ることだけを考えて、流れてきたことを示している。民族の血というものは、どれほどの時が経っても人が変わっても、変わらずに流れるもののようだ。

そしてやはり教育である。ユダヤ人はユダヤ人としての生き方の教育を子供にきちんと行う。これは大きなことだと思う。

ユダヤ人。初めて知ったいろいろな事実。日本人である私は、ユダヤ人を学んだことで、何を考えただろう。これからも、少しでもその答えが出るように考えていきたいと思う。

参考文献

日本マラマッド協会編 『アメリカ映像文学に見る少数民族』 大阪教育出版、1999年。
マックス・エ・ディモント 『ユダヤ人』朝日選書、1997年。
デアーサー・ケストラー 『ユダヤ人とは誰か』 三交社、1994年。
山本七平 『一つの教訓・ユダヤの興亡』 講談社、1987年。
ディヴィット・K・シプラー 『アラブ人とユダヤ人』 朝日新聞社、1990年。
松尾式之 『民族から読みとくアメリカ』 講談社選書メチエ、2000年。
イアン・ブルマ 『戦争の記憶　日本人とドイツ人』 TBSブリタニカ、1994年。
V・E・フランク 『夜と霧』 みすず書房、1961年。
早乙女勝元 『アウシュビッツと私』 草の根出版会、1988年。
マルセル・リュビュー 『ナチ強制・絶滅収容所』 筑摩書房、1998年。
米谷ふみ子 『過越しの祭』 新潮社、1985年。
斎藤真外監修新訂増補 『アメリカを知る事典』平凡社、2000年（新訂増補）。
岩波ケンブリッジ 『世界人名辞典』 岩波書店、1997年。
犬飼道子 『旧約聖書物語』 新潮社、1994年。
テディ・コレック他『聖都エルサレム』 学習研究社、1979年。

（レポート指導教員　松崎洋子）